

## 歴史研究の成果を紹介

# シンポジウム「奥会津の戦国文化をさぐる」開催

6月25日、国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）の主催と只見町教育委員会の共催で、只見町をはじめとする奥会津の中世を探るシンポジウムが季の郷湯ら里で開催され、町内外から約100名が来場しました。只見町を舞台にした最新の調査・研究にもとづき、町の歴史と文化の厚みが新しい視点によって解明されましたのでご紹介いたします。

▲中世以来の人々の生活を新しい視点と方法で掘り起こしたシンポジウム

### — 1部 —

このシンポジウムは地域文化の保存・継承・発信を東北および四国地方を中心に考えていこうとする国立歴史民俗博物館の共同研究「地域における歴史文化研究拠点の構築」の一環として開催されました。同博物館では町教育委員会と共同で、只見町をはじめとする奥会津の歴史文化を、様々な角度から調査・研究し、それらをどのように保存・発信して、地域の資源として活用していけばよいのかを考えてきました。今回のシンポジウムはそうした成果を持ち寄り、地域住民の皆さんと研究者と一緒に地域の歴史文化について考えようとしたものです。

### — ①渡部賢史さんの報告 —

最初の報告は只見町教育委員会の渡部

賢史さんによる「城館跡から中世を考

るく考古資料から」と題したもので、最初に町内における文化財調査の概要が示されました。特に中世の城館跡がどれくらい把握されているかについて確認が行われ、さらに黒谷地区の黒谷館跡の発掘調査の成果物、出土品が紹介され、珍しい青磁やうるし塗りの椀、サイコロなどが発見されたことが報告されました。これらは後の時代の記録史料からは漠然としか分からなかった中世の只見の生活とそれを支える人や物の行き来の様子を具体的に知る手がかりになることが述べられ、土の中に埋もれていた歴史の解明が始まったことが説明されました。

### — ②三上喜孝さんの報告 —

2番目の報告は、国立歴史民俗博物館の三上喜孝さんの「仏堂の落書きにみる中世びとの交流・信仰」というものでした。まず、これまで取り組んできた山形県や新潟県における中世に遡る<sup>さかのぼる</sup>仏堂の落書き（墨書）の様子が紹介され、こ



▲黒谷館跡の発掘現場(右)と黒谷館跡から発見されたうるし塗りの椀(左上)とサイコロ(左下)



▲只見町で発見された「神皇正統記」の写本

▲中世に遡る多くの落書きが残る梁取地区の成法寺観音堂



これらには地域を越えて共通性が見いだせることが述べられました。次いで梁取地区の成法寺の観音堂にもそれと同じ種類の落書きが大量に遺されていることが判明し、これらには会津をはじめとする日本列島各地の地名が見いだせるほか、絵も描かれ、これまでに発見されてきた落書きに数多くの新しい情報を追加することができる新発見であることが述べられました。中世の只見地方に多くの人々が観音信仰をきっかけに往来し、神仏に対する様々な祈願をしていたことが分かったのです。これまで古文書や記録にわずかししか記されていなかった中世の人々の姿が落書きという意外な視点から解明できることが示されました。

### ③久野俊彦さんの報告

3番目の報告は、東洋大学の久野俊彦さんの「中世書物からさぐる知と文化のネットワーク」というもので、まず国の指定文化財になっている只見の民具の調査の過程で、本(書物)にも注意が払われてきたことが優れた着眼であったと述べられました。そして、ホウイン(法印)の家や旧家、寺院などに伝わってきた本の最後の部分(奥書)に注目すると、中世に真言宗の高度な学問とそれに関する知識が只見地方に伝えられていたことが分かること、さらに珍しい『神皇正統記』の写本が中世から近代にかけて長く保存され、只見で活用されながら伝わってきたことが明らかになりました。

かになったと報告されました。生活の中で繰り返し用いられる道具として本を捉え、その内容や体裁、伝わってきた理由などを検討することで、中世に遡る文化の伝統が只見町にあったことが明らかになりました。

### 高橋充さんのコメント

最後に、福島県をはじめ南奥羽の中世史の専門家である福島県立博物館の高橋充さんがコメントを述べられました。3名の報告は、中世というこれまで史料がごくわずかしかなかった時代における新しい資料の発掘に基づくものであること、その内容は政治史よりも文化史や生活史にかかわる成果であることが指摘され、有名人や為政者ではなく、一般の人々の生活や歴史が分かるということを評価されました。奥会津、只見町にも多くの人々が行き交い、様々な文化が運ばれていたことを知る手がかりが得られたことは町の文化とその流れを新しい角度から評価していくことにつながります。

### 最後に

今回のシンポジウムでは只見町だけではなく、類似の方法で全国各地の歴史文化を掘り起こしてその価値や意義を地域の財産として活用し、後世に伝えていくことが可能であることが強調されました。このような先進的な学術研究が町内を舞台に展開していることを、只見町の誇りとして意識していきたいものです。